
テスト投稿・お題短編

香月航

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テスト投稿・お題短編

【Nコード】

N2019R

【作者名】

香月航

【あらすじ】

ツイッターお題から作成した短編です。投稿テストに。

【「夜のエレベーター」で登場人物が

「約束を破る」、「蜂蜜」という単語を使ったお話を考えて下さい】

お題【「夜のエレベーター」で登場人物が

「約束を破る」、「蜂蜜」という単語を使ったお話を考えて下さい】

*** **

「……嘘つき」

……そうは言うがね、お嬢様。

さすがにこれは、俺も言葉を失うと言うものですよ。

現在時刻は23時。

大抵の店がシャッターを下ろし終えて数刻は経っているであろう、
夜更けも夜更け。完全に夜中だ。

終電間近の満員車両を乗り継ぎ数十分、酒臭い空気からやっと開放
され、
鉛のような足を引き摺ってマンションに辿りついた。

ああ、これで今日を終えられると、待ち構えたエレベーターのドアが
開いたら…この光景だ。

パジャマ姿の愛しい彼女が、そこに立っていた。

「こんな時間に、なんて格好で外に出てるんだ」

「嘘つき。早く帰って来てくれるって言ったのに。約束破った」

「……ああ、悪かったすまなかったホントこの通り。」

明日までの資料が、どうしても間に合わなかったんだ」

「……うそつき」

頭二つ分ほど低い位置から、恨めしそうに“うそつき”を繰り返される。

別に俺だって、好きで残業になった訳じゃないんだが。

（今言い訳しても、無駄だよな）

黒目がちの瞳が潤んでいるのは、きっと俺の帰りが遅かったからだけじゃない。

それを知っていたからこそ、ここに今彼女がいることに驚いたのだ。

「……熱、まだ下がってないんだろ。顔赤いぞ」

「うるさいうそつき。ばーか、きらいになってやる」

「はいはい」

今日は起床時から39度を超える高熱があった彼女。

無理矢理なだめて仕事を休ませたのに、どうしても最後まで大人しくしてられないもんかね。

「……きらいに、なるんだから」

「…そうですね」

聞き慣れた電子音と共に扉が閉まれば、細い体をぴったりとすり寄せてくる。

変わらず、恨み言をつぶやきながら。

（……ああもう、本当にこのヒトは）

『嫌いなんじゃないのか？』なんて指摘できるはずもない。
こんな可愛い生き物、他では絶対お目にかかれない。

口から出る言葉と行動はいつも真逆。

人一倍寂しがりで、甘えたがりで、可愛くて可愛くて……ああもう、可愛い。

狭いエレベーターの中、季節はずれの冬物パジャマが暑いなんて、そりゃーこの際どうでもいい訳ですよ。

「ただいま。遅くなってごめん。……愛してる」

「うん、知ってる」

なるべく優しく髪を撫でれば、嬉しそうに目を細めて、またすり寄ってくる。

思わず『仔猫ちゃん』とか口にしようになったのを気力で堪えた。

（愛してる……愛してる）

全部声にしたらうっとうしいから、残りは心の中で囁く。

どれだけ仕事が忙しかろうが辛かろうが、この一時のためにならいくら

でも頑張れる。

誰よりも愛しい彼女と、今日もこうして一日の終わりを共に過ごせる。

それはきっと、世界で一番尊く、しあわせなことなのだから。

「しかし、腹減った… やつとメシにありつける。冷蔵庫に何かあったよな」

「ご飯、作ったもん。先に食べちゃったけど」

「そうなのか？ 具合が悪かったのに、ごめんな。もうゆっくり寝ていいから…」

「一緒にいるわよバカ。」

一日中寝てて暇だったんだから、愚痴ぐらい聞きなさいよ」

「はいはい、お姫様。じゃあコーヒーは俺が淹れるよ」

「ミルクでいい。今は甘いのが気分」

「じゃ、今夜は俺もそうするか。蜂蜜も入れて、二人で病人食だな」

再び、聞きなれた電子音と共にドアが開く。
さあ我が家は目の前… にも関わらず、サンダル彼女は駆け出していく。

「こら、具合悪いんだから走らなくても…」

「だって、あなたに先に着かれちゃ駄目でしょう？」

わずか数歩分の距離を嬉しそうに先導すると、玄関前でくると一礼。

「お帰りなさい、旦那さま。今日も一日お疲れ様」

そして向けられる、溢れんばかりの極上の笑顔。

ああ、もう、本当に。

熱があるんだからとか、もうこんな時間だからとか、言いかけた言葉は全部すっ飛んで

溶ける。

「ただいま、俺の可愛い奥さん」

たまらず抱きしめに走っていく男。

喧騒はほんの一瞬で、扉が閉まればあとは再び夜の静寂。

冷静沈着、クールビューティー、ポーカークフェイス

そんな辺りの形容詞を余すことなく浴び続けて来た、ご近所で噂の
“ 仕事人間夫妻 ”

そんな二人の、砂糖よりも蜂蜜よりも甘い真相は、エレベーターの
ドアだけが
知っている。

(後書き)

男視点はたまに書きますが、現代モノとか本当に縁がないので『エレベーター』と言うお題の時点で半分挫折した一作です…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2019r/>

テスト投稿・お題短編

2011年3月30日08時09分発行